

まっかな秋を訪ねてまわる

学校長

先日、石名坂歩道橋の辺りで朝の挨拶に立っていて、歩道橋下の道ばたに数本の彼岸花を見つけました。今年は、自宅から学校までの通勤路で彼岸花を見て季節を感じる事がなかったのも、目の覚めるような真っ赤な彩りに一瞬で心を奪われてしまいました。

さて、幼い頃、「まっかな秋」という歌が好き（と言うよりは、あの頃は今のようにな身近に様々なジャンルの音楽に触れる機会がなく、多くの人が学校で習った音楽を口ずさんでいた時代でしたが…）で、秋の遠足のバスでは、毎年この歌をみんなで歌っていた記憶があります。3番に、「まっかだな まっかだな 彼岸花って まっかだな」という歌詞があります。私は、「古くから続く日本の田園の原風景があったから、こんな素敵な歌詞が生まれたんだろう」と、この曲が歌い継がれてきた歴史について調べてみました。すると意外なことに、この曲は1963年発表の童謡で、私が学校で習ったのは、この曲ができてまだ十年あまりの頃のことだったのです。つまり、当時この曲は、伝統的な曲というよりはむしろ新曲の部類だったのかと驚き、当たり前には描かれた日本の田園の原風景というよりは、もしかしたら消えつつあると感じたその風景に危機感をもって作られたものだったのかも…と、曲を振り返る機会になりました。

歌詞を覚えていらっしゃるでしょうか？ 曲は、「つたのはっぱ・もみじのはっぱ・沈む夕日・まっかなほった・からすうり・とんぼの背中・夕焼け雲・お宮の鳥居」とまっかに染まった秋を、君と僕が楽しげに訪ねてまわる様子を表現しているのですが、今の生徒は、この情景を思い浮かべることができるでしょうか。中には、もう実体験として理解できないものもあるのではないのでしょうか。

本校に異動が決まった際、以前に本校に勤務経験のある同僚から、「坂中から見る秋の夕焼けは、どんな疲れも吹き飛ばしてくれるから…」と励まされてきたのですが、いよいよその季節がやってきました。校歌の3番にも「夕映え匂う 丘に立ち 無限の空を 仰ぎつつ」とあります。一般公開も含めた最後の紫苑祭に向け、準備も練習もいよいよ待たなしの状態になってきましたが、西校舎4階からの夕焼けを見ながら生徒と教職員共に手を取り合って取り組んでいこうと思います。